

研 究

現代の家庭育児における子守歌の機能

— 0～35か月児に対する母親の肉声による歌いかけと
オーディオ等による音楽利用の比較検討 —黒石 純子¹⁾, 梶川 祥世²⁾

〔論文要旨〕

現代の家庭育児における子守歌使用の実態を明らかにすることを目的とし、生後0～35か月児の母親261名を対象に質問紙調査を行った。肉声で直接歌いかける場合（肉声形式）とオーディオ機器等で音楽を聞かせる場合（オーディオ形式）の2形式について検討した結果、両形式とも寝かしつけや遊び場面でよく使われるが、生後17か月頃までの寝かしつけには肉声形式がよく使われること、両形式がそれぞれの特徴に応じた場面で使い分けられていることが示された。また子守歌に対し児が寝つく、体を動かす、声を出す等の反応は両形式で同程度見られるが、児の笑いは肉声形式でよく見られることが示された。両形式とも育児において児の鎮静化・活性化等の機能を果たしていることが示唆された。

Key words : 乳幼児, 子守歌, 質問紙調査, 肉声形式, オーディオ形式

I. 背 景

乳幼児に対して養育者が子守歌を歌う行動は、文化や時代を超えて広くみられる育児行動である。乳幼児を寝かしつけたり落ち着かせたり喜ばせたりするなど、その効果は経験的に認識されてきたが、近年乳幼児に対する歌唱音声や乳幼児の反応についての実証的研究により、乳児に対する歌唱音声が特有の音響特徴を示す傾向があり^{1,2)}、効果的に乳児の注意を喚起すること³⁾、児の覚醒状態を一定レベルに安定させること⁴⁾、などが示されてきた。子守歌については乳幼児に対する効果だけでなく、歌う側の養育者のストレス解消などに大きく関連している側面もあり⁵⁾、育児に関する社会的問題が

多く浮上している現在、その役割が期待される。

近年の子守歌に関する調査をみると^{5,6)}、時代的背景とともに、歌われる曲目に変化していることがうかがえる。現代では伝統的な子守歌に代わり、比較的新しい童謡や唱歌、テレビなどメディアで普及した歌などが中心となることが示されている。小林ら⁵⁾の研究では、歌われる曲目は変化しても、乳幼児をあやしたり、寝かしつけたりする目的で使用されるならば、コマーシャルソングやアニメソングも広義に子守歌と呼ぶことができるのであり、また多くの母親が、子どもの心を静めるなどの子守歌の効果を実感していることから、現代の育児においても子守歌は健在である、と考察されている。

Current Function of Lullaby and Play Song for Infant and Toddler Care at Home :
A Comparative Study on Maternal Singing and Use of Recorded Music Addressed to
0 to 35 Month-olds

[1916]

受付 07. 3. 1

採用 08. 6. 24

Sumiko KUROISHI, Sachiyo KAJIKAWA

1) ビジョン株式会社 (研究職) 2) 玉川大学脳科学研究所 (研究職)

印刷請求先: 黒石純子 ビジョン(株)中央研究所開発本部基礎研究部

〒300-2495 茨城県つくばみらい市絹の台6-20-4

Tel : 0297-52-6536 Fax : 0297-52-6534

しかし実際の育児の中でそれらの曲がどのように使われているのか、子守歌使用の実態は先行研究からは明らかではない。日本における子守歌は、歌われる乳幼児への機能に注目した場合、寝かしつける時に歌うもの（眠らせ歌、寝させ歌など）と、起きている時にあやすもの（遊ばせ歌、あやし歌など）に分類されることが多いことから^{7,8)}、子守歌の代表的な機能として、乳幼児を眠らせ落ち着かせ鎮静させる機能と、乳幼児の注意を喚起し活性化させる機能の2つを考えることができる。現代の育児において子守歌がこのような機能を実際に果たしているかを明らかにすることは、子守歌という育児行動の本質を明らかにするうえで必要である。そのためには歌われる曲だけでなく、子守歌がどのような場面で使われ、子守歌のどのような効果を養育者が認識しているかを調べる必要がある。

さらに時代的背景とともに曲目が変化しても変わらない子守歌の要素のひとつとして、養育者が至近距離で乳幼児に肉声で歌いかけるといった特徴が考えられる。しかし現代はオーディオ機器や電子音を搭載した玩具が各家庭で充実し、養育者が歌わずとも、幼児向けテレビ番組や音の出る玩具やCDなどから、乳幼児は多様な音楽を聞くことができる。乳児の母語以外の音韻弁別能力を調べた実験的研究では、ビデオで提示された音声聞いた場合と直接人の語りかけを聞いた場合とでは、生後9か月児の音韻弁別能力が異なるという結果が示され、社会的相互作用が音韻獲得に重要な役割を果たすことが示唆されている⁹⁾。また障害児に対する音楽療法では、録音音楽よりも直接的な歌いかけの方が効果のあることが示されている¹⁰⁾。乳幼児に対する歌いかけについても、直接肉声で歌いかける場合と、オーディオ機器や玩具などから音楽を聞かせる場合について、それぞれの機能や効果を明らかにすることは、両者を積極的に活用するうえでも必要であると思われるが、現代の育児において養育者が乳幼児に対してどの程度直接肉声で歌いかけ（以下、肉声形式と呼ぶ）、どの程度オーディオ機器等で音楽を聞かせているのか（以下、オーディオ形式と呼ぶ）、またこの2つの形式がどのように使い分けられ

ているのかなどの実態は、先行研究からは明らかでない。

子守歌に対する乳幼児の反応、特に養育者が認識しやすい行動レベルの反応は、音刺激全般に対する乳児の反応特性から、以下のような予測が可能である。

生後6か月頃までの子守歌に対する乳児の反応は比較的受身的反応といえる¹¹⁾。新生児は音刺激に対し、もっぱら反射により音源定位などの行動を示し、生後1～2か月頃には声や音に対して泣き止んだり動作を止めたりする行動停止を示す¹²⁾。新生児期にはどんな音でも音がない場合よりも児の啼泣が治まるという指摘もあり¹¹⁾、必ずしも子守歌特有の反応が生起するとは考えられないが、養育者が子守歌により乳児が泣き止む、おとなしくなるという効果を認識し、またそのような効果が期待される寝かしつけ等の場面で子守歌がよく使用されていることが予測される。

さらに生後早くから乳児が示す反応として微笑が挙げられる。新生児期は主にREM睡眠時に生起する自発的微笑が中心であるが、生後1～2か月頃までには外部刺激に誘発される外発的微笑を、生後3か月頃までには人の声や顔に対して生起する社会的微笑を示すようになる¹³⁾。子守歌の聴覚的・視覚的刺激により乳児の微笑が生起することにより、子守歌に対して笑う反応として生後2～3か月頃から養育者に認識されることが予測される。

以上のような乳児の反応は、生後3か月頃から次第に選択的なものとなり、聞き慣れた人の声によく反応するようになる¹²⁾。さらに生後4か月以降にはガラガラなどの物理的な音よりも人の声に選択的に微笑するようになる¹³⁾。このことから特に生後1年目前半頃は、直接的社会的相互作用のある肉声形式の子守歌の方が、オーディオ形式の子守歌よりも乳児の反応を誘発しやすく、特に笑うといったポジティブな反応は肉声形式で認識されやすいことが予測される。

生後6か月頃までに、乳児はそれまでの受身的な反応に対して、より積極的に音楽や歌に反応し始める。身体能力および認知能力の発達に伴い、音源に積極的に注意を向け、じっと聞く

様子をみせるようになり、テレビコマーシャルやラジオの音など生活環境のあらゆる音へ注意を向けるようになる¹²⁾。また音楽や歌に対して律動的な揺れ、飛び跳ねなど身体運動を示すようになり、生後9～10か月頃には音楽や歌のリズムに合わせた動作がみられるようになる^{11, 12)}。

さらに生後7～10か月頃には、乳児は喃語を発するようになる。喃語期の乳児は、まるで歌っているような「歌唱様発声」¹⁴⁾を発することがある。このため、実際に乳幼児が歌を歌えるようになる時期は2～3歳頃^{11, 15)}とされているが、実際には乳児の喃語期の発声を歌唱行動と捉える養育者も多いと考えられる。

以上のように生後1年目後半は、鎮静効果に加え、乳児の注意を喚起し、積極的に行動を起こさせる子守歌の機能がより多くの養育者に認識され、またそのような場面で子守歌が使われるようになると考えられる。

生後2年目以降は、言語発達に伴い、歌詞そのものを楽しむ反応や、歌詞の内容に付随した行動を示すなどが考えられる。しかし生後2年目以降の乳幼児の音楽や歌に対する反応は、音楽教育や保育における音楽活動についての研究が中心となり、子守歌に対する乳幼児の反応として系統的予測をすることは難しい。家庭における子守歌が、養育児が何歳になる頃まで使われる傾向があるかについての資料は見当たらないが、3歳ごろになると幼児の社会的な生活空間は近隣社会へと次第に拡大し、保育園や幼稚園など家庭外での音楽活動経験が増加するため、家庭に限定した子守歌の効果は捉えにくくなると考えられる。

以上の視点から、本研究は現代の家庭における子守歌使用の実態を明らかにし、その機能を考察することを目的として、乳幼児の養育者に対する質問紙調査を行った。本研究では0～35か月齢に焦点をあて、児の月齢による変化を横断的に検討することとした。生後3年間の全体的な変化を捉えるため、対象児を、微笑など受身的かつ静的反応や鎮静効果が中心と考えられる生後1年目前半(0～5か月)、積極的な運動・発声による反応や活性化効果が増加すると考えられる生後1年目後半(6～11か月)、そ

れ以降は生後1年目に合わせ、6か月毎に6つの月齢群(0～5か月、6～11か月、12～17か月、18～23か月、24～29か月、30～35か月)に分け、比較分析を行うこととした。肉声形式とオーディオ形式別に、どのような場面で子守歌が使われているか、どのような曲が使われているか、そして養育者がどのような乳幼児の反応を捉えているかを明らかにし、場面と形式と月齢との関連、よく使われる曲の場面特性、養育者がとらえる乳幼児の反応と形式と月齢との関連などを明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 調査方法および対象

東京都内T大学内研究施設に乳幼児研究の協力者として登録している母子、および育児用品メーカーP社のモニター制度に登録している母子を対象とした。前者は全員大学近郊(東京都あるいは神奈川県)に在住、後者は全国すべての都道府県に在住している母子である。対象者の抽出は、T大学とP社個別に行った。T大学の研究協力者については、調査時に月齢が0～35か月であった登録者全員を対象とした。各月齢群の人数は158名(0～5か月4名、6～11か月42名、12～17か月42名、18～23か月33名、24～29か月25名、30～35か月12名)であった。P社の研究協力者については、T大学の対象者総数にほぼ合わせ、各月齢群毎に23～26名、合計145名を抽出した。抽出に際しては、得られる個人情報に限られていることから、出生順位、母親の年齢、母親の就業状況などについて考慮し抽出することは不可能であったが、児の性別については各月齢群内でほぼ同数になるよう考慮した。その結果最終的に、34都道府県在住の303組が対象者となった。郵送による質問紙調査(無記名)を実施した結果、263名(T大学135名、P社128名)から回答を得た(回収率86.8%)。

回答は対象児の主要養育者に依頼したところ、1例のみ祖母が回答し、その他は母親による回答であった。また被養育児が複数いる場合には、T大学およびP社に登録している児1名に限定して回答するよう依頼した結果、1例が指定した子ども以外について回答していた。今

回は回答者を母親に統一するため祖母による回答の1例を除き、さらに指定外児について回答された1例を除く261名分の回答を最終的な分析対象とした。

T大学の研究協力者とP社の研究協力者の等質性を調べるため、両群の基本属性を比較検討した。児の月齢、母親の年齢、世帯子ども総数の各平均値をt検定により、児性別、世帯の種類(核家族世帯、三世帯世帯、その他)、母親の就業状況(職業あり、職業なし)、母親の音楽教育・活動経験の有無については、人数分布の比率をカイ二乗検定により比較し、結果を表1に示した。母親の年齢、世帯の種類、世帯子ども総数について、T大学とP社の間に有意な差が認められたが、その他の属性については有意差は認められなかった。本研究では、兄弟姉妹の影響や出生順位の影響および世帯種類の影響について回答傾向の違いを検討することを目的としなかったため、両群を分析上等質とみなし、両群から得た回答を合わせて結果の分析および考察を行った。

最終的な分析対象者の母親年齢は平均32.0歳

(範囲=18~44歳, $SD = 4.6$)であった。対象児の月齢群別の人数、性別および平均月齢は表2の通りである。対象児の出生順は第1子54.4%(うち弟妹なし52.5%, あり1.9%), 第2子36.4%(うち兄姉のみを持つ末子35.2%, 兄姉および弟妹を持つ中間子1.1%), 第3子6.9%(すべて末子), 第4子0.8%(すべて末子), その他1.1%, 不明0.4%, であった。世帯種類は、核家族世帯85.3%, 三世帯世帯13.5%, その他1.2%であった。母親の就業形態は、職業ありが18.8%, 職業なし(専業主婦)が78.2%, その他3.1%であった。

表2 対象児の月齢群別人数および平均月齢

月齢群	人数			月齢	
	男児	女児	計	平均	標準偏差
0~5か月群	13	12	25	2.7	1.52
6~11か月群	36	19	55	8.8	1.84
12~17か月群	35	33	68	14.2	1.74
18~23か月群	24	21	45	20.5	1.82
24~29か月群	21	19	40	26.1	1.77
30~35か月群	12	16	28	32.4	1.64
全 体	141	120	261	16.8	8.89

表1 対象者の基本属性およびT大学の研究協力者とP社の研究協力者の比較

基本属性		T大学(n=134)	P社(n=127)	全体(n=261)	T大学とP社の差
対象児の月齢		平均=16.9 標準偏差=7.39 範囲=3~33	平均=16.7 標準偏差=10.27 範囲=0~35	平均=16.8 標準偏差=8.89 範囲=0~35	<i>ns</i> ($t = .209, df = 228.1$)
対象児の性別	男児 女児	78名(58.2%) 56名(41.8%)	63名(49.6%) 64名(50.4%)	141名(54.0%) 120名(46.0%)	<i>ns</i> ($\chi^2 = 1.943, df = 1$)
母親の年齢		平均=32.6 標準偏差=4.57 範囲=23~43	平均=31.4 標準偏差=4.57 範囲=18~44	平均=32.0 標準偏差=4.60 範囲=18~44	$p < .05$ ($t = 2.036, df = 244$)
世帯の種類	核家族世帯 三世帯世帯 その他 (無回答)	117名(87.3%) 12名(9.0%) 3名(2.2%) 2名(1.5%)	104名(81.9%) 23名(18.1%) 0名(0.0%) 0名(0.0%)	221名(84.7%) 35名(13.4%) 3名(1.1%) 2名(0.8%)	$p < .05$ ($\chi^2 = 7.128, df = 2$)
世帯の子ども総数		平均=1.32 標準偏差=0.56 範囲=1~4	平均=1.84 標準偏差=0.71 範囲=1~4	平均=1.57 標準偏差=0.68 範囲=1~4	$p < .01$ ($t = -6.604, df = 239.4$)
母親の就業状況	職業あり 職業なし その他	18名(13.4%) 111名(82.8%) 5名(3.7%)	31名(24.4%) 93名(73.2%) 3名(2.4%)	49名(18.8%) 204名(78.2%) 8名(3.1%)	<i>ns</i> ($\chi^2 = 5.353, df = 2$)
母親の音楽教育・活動経験	あり なし (無回答)	59名(44.0%) 74名(55.2%) 1名(0.7%)	66名(52.0%) 61名(48.0%) 0名(0.0%)	125名(47.9%) 135名(51.7%) 1名(0.4%)	<i>ns</i> ($\chi^2 = 1.506, df = 1$)

2. 質問紙

質問紙は2部構成とし、第1部で肉声形式について、第2部でオーディオ形式について質問した。それぞれの形式について、子守歌使用の有無、子守歌を使う場面、使う曲、そこでみられる児の反応、を回答してもらった。さらに形式を明らかにするために、肉声形式については伴奏の有無、オーディオ形式については音源の種類を回答してもらった。具体的な質問文および回答形式は以下の通りである。なお今回分析の対象としなかった質問項目(児が特に好きな曲、その曲を覚えたきっかけ、子守歌を歌う時の歌う人の姿勢・動作など)については以下では省略した。

第1部

「肉声による歌いかけ(直接赤ちゃんに歌いかけること)についてうかがいます。」

1. 「お子さまに歌を歌いかけることはありますか。」(回答形式: YES-NO 回答)
2. 「どのような場面で、どのように歌いかけを行っていますか。またそのときのお子さまの様子はどのようなですか。」

(回答形式: まず子守歌を使う場面(以下、場面と呼ぶ)を挙げてもらい、それぞれの場面について、曲のタイトル(その場面で歌う曲のタイトル、タイトルがわからない場合は歌いだしの歌詞など)、伴奏の有無(CDなどのオーディオ機器や玩具の音などに合わせて歌うか、あるいは肉声のみで歌うか)、児の反応(そのときの子どもの様子)、を記入してもらった。回答欄には複数の場面について記入できるような枠を用意し、枠内に自由に記述してもらった。)

第2部

「肉声による歌いかけ以外に、お子さまに音楽を聞かせること(オーディオ機器、テレビ、オルゴール、楽器などで音楽を聞かせること)についてうかがいます。」

1. 「肉声による歌いかけ以外に、お子さまに音楽を聞かせていますか。」(回答形式: YES-NO 回答)
2. 「どのような場面で、どのような曲を聞かせていますか。またそのときお子さまの様子はどのようなですか。」

(回答形式: 第1部と同様に、まず子守歌を使う場面を挙げてもらい、その場面で使う曲のタイトル、音源の種類(CD、ビデオ、オルゴールなど具体的に)、児の反応、を記入してもらった。)

質問紙の表紙および最終頁で、回答者の年齢、就業状況、音楽教育・活動経験の有無、対象児の生年月日と性別、すべての兄弟姉妹の年齢および性別、世帯の種類を回答してもらった。

3. 集計および分析

子守歌使用の有無については、はい/いいえそれぞれの人数および比率を集計した。自由記述で回答を得た、場面および児の反応については、母親全体に挙げられた全内容をKJ法¹⁶⁾によりまとめた。2種類以上の内容が含まれる回答(例:「歌ったり踊ったりする」)については、内容がひとつだけになるよう分けて単位化し群編成を行った。最終的に編成された群について、各群の内容を回答した母親の人数および比率を集計した。さらに、子守歌使用の有無、場面、児の反応について、母親の比率が形式間で、また月齢群間で異なるかを、形式間の差についてはマクニマー検定、月齢群間の差については形式ごとのカイ二乗検定により調べた。集計および分析にはSPSS12.0Jを用いた。

さらに使われる曲の場面特性を検討するため、それぞれの形式で多く挙げられた上位20曲について分析を行った。児を鎮静させ眠らせるか、あるいは活性化させるか、という鎮静性に関する機能に注目し、各曲がどの程度児を寝かしつけるために使用されているか(鎮静性)、そして特定の場面で使われているかあるいは多様な場面で使われているか(単用性)という2つの観点から各曲の特徴を調べた。まず対象者全員の場面上記の通り集計し、各曲がどのような場面で使われる傾向があるか曲別に場面の内訳を算出し、「寝かしつける時」(Ⅲ結果、2参照)が占める割合を鎮静性、最も多かった場面が占める割合を単用性とした。

Ⅲ. 結 果

1. 子守歌の使用の有無

肉声形式で乳幼児に子守歌を聞かせることが

あると答えた母親は261人中255人 (97.7%), オーディオ形式で子守歌を聞かせることがあると答えた母親は242人 (92.7%) であった。形式により回答の比率に有意差が認められ、肉声形式で子守歌を使う母親の比率が多かった ($p < .05$)。形式別に各月齢群の割合をみると (表3), オーディオ形式の0~5か月群および6~11か月群で比較的少なかったものの、いずれの形式においても月齢群間に有意な差はなかった。

2. 子守歌が使われる場面

子守歌を使う場面を、複数回答で挙げてもらった結果、母親一人当たりが挙げた場面の数は、肉声形式では一人当たり平均3.4場面 ($SD = 1.4$), 母親全体で合計855場面が挙げられた。場面ごとに記入された伴奏の有無を集計したところ (伴奏あり・なし両方と回答されていた場面については、伴奏あり・なしの両方にカウントした), 855場面のうち、CDなど何らかの伴奏を伴って歌われている場面 (伴奏あり) は286場面 (33.5%), 伴奏を伴わず肉声のみで歌われている場面 (伴奏なし) は619場面 (72.4%) であった。本研究では肉声形式とオーディオ形式の違いを明確にするため、伴奏なしで歌われていた619場面のみを肉声形式の分析対象とした。一方オーディオ形式では母親1人あたりが挙げた場面の数は平均2.1場面 ($SD = 1.2$), 母親全体で合計505場面が挙げられた。どのような音源で子守歌を聞かせているか、場面ごとに記入された音源を集計したところ (複数の音源が使われている場面については、それぞれす

べての音源にカウントした), CD・MDが339場面 (67.1%), テレビ・ビデオ・DVDが104場面 (20.6%), 玩具や音の出る絵本が32場面 (6.3%), 楽器が31場面 (6.1%), オルゴールが24場面 (4.8%), その他が7場面 (1.4%) であった。

以上の肉声形式619場面、オーディオ形式505場面について、母親の記述内容に忠実に、回答をKJ法によりまとめた結果、最終的に「寝かしつける時」、「入浴時」など表4に示す通り14場面にまとめられた。少数回答はその他としてまとめた。14場面の回答例およびその場면을挙げた母親の人数および比率を表4に示す。さらにこれらの場면을挙げた母親の比率が、形式間で、また月齢群間で有意に異なるかについて、マクニマー検定およびカイ二乗検定により調べた結果を図1-a~1-iに示す。両形式とも比率が10%未満の場面である「TVやCDを視聴している時」、「食事中」、「本人 (児) から要求された時」、「機嫌のよい時」、「親が歌いたい/聞きたい時」については、度数が極めて小さいため、形式間および月齢群間の比較分析は行わなかった。また比較分析を行った場面のうち、度数の小さかったオーディオ形式の「入浴時」、「散歩や外歩き時」、「日常の世話をする時」、および肉声形式の「乗車時」、「日中暇な時」、「親が忙しい時」については、月齢群間差の検定は行わなかった。

「寝かしつける時」 (図1-a) は肉声形式において最も多く月齢全体で45.6%の母親に挙げられ、オーディオ形式の20.3%よりも多かった ($p < .001$)。肉声形式では月齢群間に有意差が認められ ($\chi^2 = 14.38, df = 5, p < .05$), 0~5, 6~11, 12~17か月齢群が他の月齢群より多い傾向がみられた。

「遊んでいる時」 (図1-b) は、形式間および月齢群間に有意差はなく、いずれの形式でも約30%の母親に挙げられていた。

「ぐずった時」 (図1-c) は形式間に有意差はみられなかった。月齢群間の有意差は両形式において認められ (肉声形式 $\chi^2 = 31.47, df = 5, p < .001$, オーディオ形式 $\chi^2 = 11.15, df = 5, p < .05$), 肉声形式は0~5, 6~11, 12~17か月齢群が他の月齢群より多く、18~23

表3 肉声形式/オーディオ形式で子守歌を聞かせることがあると答えた母親の人数および比率

月齢群	肉声形式		オーディオ形式	
	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)
0~5か月群	24	96.0	22	88.0
6~11か月群	54	98.2	47	85.5
12~17か月群	67	98.5	65	95.6
18~23か月群	43	95.6	43	95.6
24~29か月群	40	100.0	39	97.5
30~35か月群	27	96.4	26	92.9
全 体	255	97.7	242	92.7

%は各月齢群の総数に対する比率

表4 子守歌が使われる場面

数値は各場面を挙げた母親の人数および比率 (n=261)

場面 (回答例)	肉声形式		オーディオ形式	
	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)
寝かしつける時 例)寝かしつける時, お昼寝の時, なかなか寝ない時	119	45.6	53	20.3
入浴時 例)お風呂に入れている時, 髪を洗っている時, 母親がお風呂に入っている時	97	37.2	1	0.4
遊んでいる時 例)歌って遊ぶ時, 手遊びする時, 音の出る絵本を見ている時, 特に決めていないが遊んでいる時	76	29.1	78	29.9
散歩や外歩き時 例)散歩中花や木を見て, 元気よく歩いている時, 買い物の行き帰りベビーカーを押している時	56	21.5	1	0.4
ぐずった時 例)泣いたりぐずったりした時, 機嫌が悪い時, 静かにさせる時(電車の中など)	50	19.2	31	11.9
日常の世話をする時 例)歯磨きの時, おむつをかえる時, 着替えさせる時, トイレに行かせる時, 体温測定の時	46	17.6	4	1.5
乗車中 例)ドライブ中, 車を運転中, 車に乗って退屈そうな時	18	6.9	79	30.3
日中暇な時 例)日中暇な時, 特に何もしていない時, 自宅にいる時特に意識せずBGM的に	11	4.2	46	17.6
TVやCDを視聴している時 例)TVを見ながら, おかあさんといっしょのビデオを見る時, 幼児向け英語教育のサンプルCDを聞く時	10	3.8	19	7.3
食事中 例)食事中(あまり食が進まない時), 朝昼夜ごはんを食べる時BGMとして	7	2.7	18	6.9
親が忙しい時 例)家事をしている時おとなしくさせるために, 忙しくて遊んであげられない時	5	1.9	30	11.5
本人(児)から要求された時 例)子どもが歌ってと言ってきた時	4	1.5	8	3.1
機嫌のよいとき 例)日中ご機嫌の時	3	1.1	21	8.0
親が歌いたい/聞きたい時 例)親の気が向いた時, 親が聞きたい時, 母親がCDをかける時	3	1.1	9	3.4
その他 例)朝起きた時, 雨の時, TVやビデオを消したい時, 季節感をもって歌うためその季節らしい状況で	25	9.6	34	13.0

か月齢群以降に少なくなる傾向があり, オーディオ形式では18~23か月齢群が他の月齢群よりも少なかった。

「入浴時」(図1-d), 「散歩や外歩き時」(図1-e), 「日常の世話をする時」(図1-f)はオーディオ形式より肉声形式が多かった(いずれも $p < .001$)。「散歩や外歩き時」は肉声形式で月齢群間に有意な差が認められ, 児の月齢が高いほど多い傾向があり($\chi^2=18.94$, $df=5$, $p < .01$), 特に24~29か月齢群で最も多

かった。

「乗車時」(図1-g), 「日中暇な時」(図1-h), 「親が忙しい時」(図1-i)は肉声形式よりオーディオ形式が多かった(いずれも $p < .001$)。「乗車時」はオーディオ形式で最も多くの母親に挙げられた場面であった(30.3%)。「乗車時」はオーディオ形式において月齢群間に有意な差が認められ($\chi^2=14.71$, $df=5$, $p < .05$), 児の月齢が高いほど多い傾向がみられた。

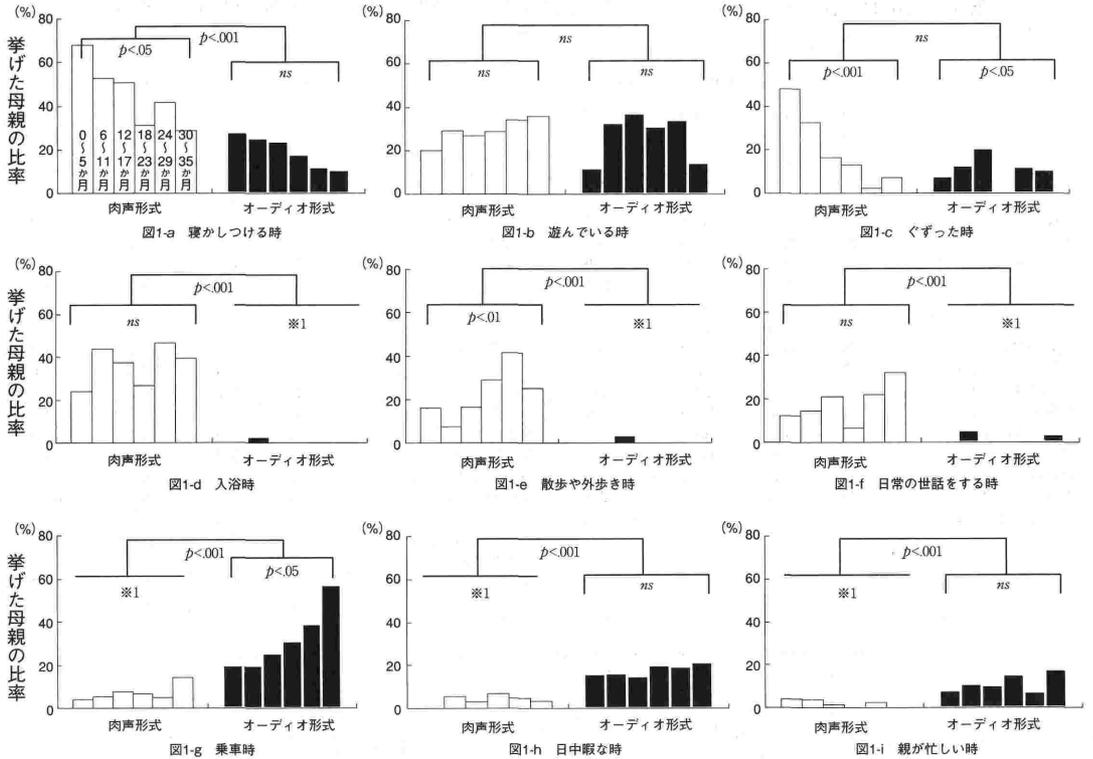


図1-a ~ 1-i 各場面を挙げた母親の比率の形式間および月齢群間比較

(n は各月齢群の総数。度数が小さく形式間および月齢群間の比較を行わなかった場面については図を省略した)

※1) 度数が小さいため月齢群間の差の検定を適用しなかった

3. 子守歌として使われる曲

各場面で使う曲を挙げてもらった結果、具体的な曲のタイトルによる回答以外に、音楽のジャンルやアーティスト名などによる回答も多くみられた。それらの回答を、母親の回答の文言に忠実に整理し集計した結果、挙げられた曲タイトル・ジャンル・アーティスト名等の種類数は、肉声形式では1,046種類、オーディオ形式では987種類であった。多くの母親に挙げられていた上位20種類の曲タイトル・ジャンル・アーティスト名等を、形式別に表5に示す。最も多くの母親が挙げている回答は、肉声形式では「ゆりかごの歌」(23.0%)、オーディオ形式ではジャンルによる回答の「童謡」(18.0%)であった。肉声形式では、上位20種類中13種類が母親世代になじみ深いと考えられる比較的新しい童謡であり、その他は伝統的な日本の子守歌、外国の童謡、アニメの主題歌などが含まれていた。また10.3%の母親が自作の歌を挙げて

いた。オーディオ形式は、「童謡」、「クラシック」、「ディズニーの歌」、「英語の歌」、「モーツァルト」等、ジャンルやアーティスト名による回答が肉声形式よりも多かった。肉声形式で多くみられたような比較的新しい童謡はオーディオ形式では9曲が上位に含まれた。さらに「ABCの歌」、「英語の歌」、「ディズニーの歌」など外国の歌や、「アンパンマンの歌」、「おかあさんといっしょの歌」のようなテレビやビデオ教材の歌が、肉声形式よりも多くみられた。

4. よく使われる曲の場面特性

各形式で挙げられた比率の高かった上位20位の曲の単用性および鎮静性を表5に示す。また図2-a、図2-bは横軸に単用性、縦軸に鎮静性をとった2次元座標に、各曲をプロットしたものである。各曲の分布をみると、図2-aの(1)、(16)、(20)と図2-bの(1)、(30)のように単用性が高く鎮静性も高い曲が両形式でみ

表5 各場面で使われる曲/ジャンル等の形式別上位20種類(合同率)の単用性および鎮静性

	肉声形式				オーディオ形式				
	度数	比率(%)	単用性(%)	鎮静性(%)	度数	比率(%)	単用性(%)	鎮静性(%)	
ゆりかごの歌	60	23.0	86.4	86.4	童謡	47	18.0	25.9	5.6
どんぐりころころ	39	14.9	29.3	4.9	クラシック	31	11.9	21.6	21.6
ぞうさん	32	12.3	31.7	14.6	アンパンマンの歌	23	8.8	26.9	3.8
げんこつやまのたぬきさん	32	12.3	26.3	13.2	ABCの歌	22	8.4	28.0	4.0
江戸の子守歌	31	11.9	87.5	87.5	「おかあさんといっしょ」の歌	22	8.4	24.0	8.0
自作の歌	27	10.3	36.1	13.9	どんぐりころころ	20	7.7	40.0	10.0
犬のおまわりさん	24	9.2	34.5	10.3	げんこつやまのたぬきさん	19	7.3	40.0	0.0
大きな栗の木の下で	24	9.2	31.0	6.9	ぞうさん	19	7.3	37.5	0.0
きらきら星	23	8.8	25.0	21.4	ディズニーの歌	19	7.3	30.4	21.7
おもちゃのチャチャチャ	21	8.0	25.9	11.1	英語の歌	18	6.9	36.4	13.6
さんぽ	19	7.3	77.3	4.5	モーツァルト	15	5.7	26.7	26.7
ABCの歌	17	6.5	40.9	13.6	きらきら星	14	5.4	40.0	26.7
アンパンマンの歌	17	6.5	34.8	4.3	おもちゃのチャチャチャ	14	5.4	35.7	0.0
森のくまさん	16	6.1	19.0	19.0	いないいないばあ	13	5.0	20.0	0.0
むすんでひらいて	15	5.7	38.9	0.0	アイアイ	12	4.6	35.7	0.0
大きな古時計	13	5.0	66.7	66.7	糸巻きの歌	11	4.2	33.3	0.0
アイアイ	13	5.0	60.0	0.0	星に願いを	10	3.8	70.0	70.0
かえるの合唱	13	5.0	43.8	0.0	むすんでひらいて	10	3.8	40.0	0.0
チューリップ	13	5.0	27.8	27.8	ゆりかごの歌	9	3.4	66.7	66.7
ちょうちょう	12	4.6	35.7	14.3	さんぽ	8	3.1	55.6	11.1
					大きな栗の木の下で	8	3.1	44.4	0.0
					小さな世界	8	3.1	40.0	10.0
					犬のおまわりさん	8	3.1	22.2	11.1
					ちょうちょう	8	3.1	22.2	11.1

- | | | |
|----------------|-------------|-----------------|
| 1) ゆりかごの歌 | 11)さんぽ | 21)童謡 |
| 2)ぞうさん | 12)むすんでひらいて | 22)クラシック |
| 3)どんぐりころころ | 13)アイアイ | 23)おかあさんといっしょの歌 |
| 4)げんこつやまのたぬきさん | 14)ちょうちょう | 24)ディズニーの歌 |
| 5)犬のおまわりさん | 15)自作の歌 | 25)英語の歌 |
| 6)大きな栗の木の下で | 16)江戸の子守歌 | 26)いないいないばあ |
| 7)きらきら星 | 17)森のくまさん | 27)モーツァルト |
| 8)おもちゃのチャチャチャ | 18)チューリップ | 28)糸巻きの歌 |
| 9)アンパンマンの歌 | 19)かえるの合唱 | 29)小さな世界 |
| 10)ABCの歌 | 20)大きな古時計 | 30)星に願いを |

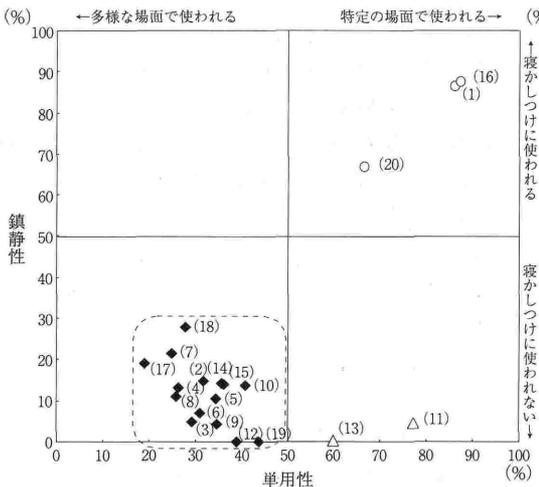


図2-a 肉声形式の上位20曲の場面特性

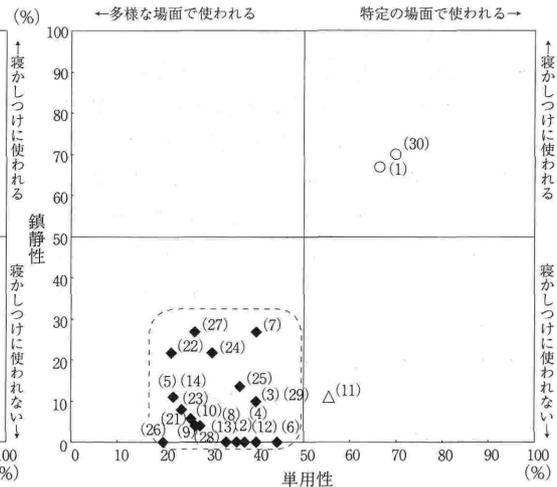


図2-b オーディオ形式の上位20曲の場面特性(同率を含む24曲)

られた(図中に○で示す)。これらはいずれも単用性と鎮静性が同値、すなわち使われる場面は「寝かしつける時」が最も多い曲であった。

さらに肉声形式において図2-aの(11), (13), オーディオ形式において図2-bの(11)のように、単用性が比較的高く鎮静性が低い曲、

すなわち「寝かしつける時」以外の場面で主に使われている曲がみられた(図中に△で示す)。肉声形式の(11)は「散歩や外歩きの時」, (13)は「遊んでいる時」, オーディオ形式の(11)は「遊んでいる時」で, 最も多く使われていた。

それ以外の曲は両形式とも, 図中に点線で示した単用性約20~50%, 鎮静性約0~30%の範囲に, 集中的に分布した(図中に◆で示す)。肉声形式ではこの範囲に含まれた15曲中(7), (9), (10), (15)以外の11曲が, オーディオ形式では21曲中10曲が, 比較的新しい日本の童謡であった。これらの童謡について鎮静性を比較したところ, 肉声形式に含まれた11曲の鎮静性平均値は11.1%(SD=8.19), オーディオ形式に含まれた10曲は平均3.8%(SD=5.11)であった。すなわち肉声形式では比較的新しい日本の童謡が寝かしつけを含む多様な場面で歌われているのに対し, オーディオ形式では童謡は同じくらい多様な場面で使用されているものの,

寝かしつけにはあまり使用されていなかった。オーディオ形式において単用性が比較的低く, かつ鎮静性の比較的高い曲は, (22), (24), (27)のように肉声形式では上位にみられない種類の曲であった。

5. 子守歌に対する児の反応

場面ごとに挙げられた児の反応を, 母親の記述内容に忠実に回答をKJ法によりまとめた結果, 最終的に「おとなしくなる・寝る」, 「体を動かす・踊る」, 「声を出す・歌う」, 「笑う」, 「歌の内容を実行する」, 「反応なし・無関心」, 「催促する」, 「音源に近づく」の8つの反応にまとめられた。それ以外の少数回答はその他としてまとめた。8つの反応の回答例および各反応を挙げた母親の人数および比率を表6に示す。さらにこれらの反応を挙げた母親の比率が, 形式間で, また月齢群間で有意に異なるかについて, マクニマー検定およびカイ二乗検定により調べ

表6 子守歌に対して見られる児の反応

数値は各反応を挙げた母親の人数および比率 (n=261)

児の反応 (回答例)	肉声形式		オーディオ形式	
	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)
おとなしくなる・寝る 例) ぐずっていたのが止まる, 静かになる, すぐに寝てしまう, 泣き止む, じつと聞いている	144	55.2	124	47.5
体を動かす・踊る 例) 体をゆすったりして動かす, 手拍子をする, 踊る, 手足をバタバタ, おしりをふって踊る	111	42.5	136	52.1
声を出す・歌う 例) 一緒に「アアア」など声を出す, 声を発している, チャチャチャなど時々一緒にうたっている	80	30.7	81	31.0
笑う 例) 笑顔になる, 嬉しそうに笑う, ケラケラ笑う, ふりむいてニコっとする	52	19.9	16	6.1
歌の内容を実行する 例) 散歩の歌に対して: 歩いたり準備を急ぐ, 歯磨きの歌に対して: あわてて歯をみがきたいと言う	23	8.8	4	1.5
反応なし・無関心 例) まだ反応がない, あまり聞いていないようだ, あまり興味があるとは思えない, 特になし, 無視	22	8.4	38	14.6
催促する 例) やめるとまた歌って欲しそうにさそう, また玩具のボタンを自分で押し持ってくる	6	2.3	6	2.3
音源に近づく 例) 楽器を不思議そうに見たり触りたがったりする, スピーカーに向かう	0	0.0	24	9.2
その他 例) 母親をボンボンしたりしている, ポスターを見ている, 夕焼けにたそがれている	23	8.8	22	8.4

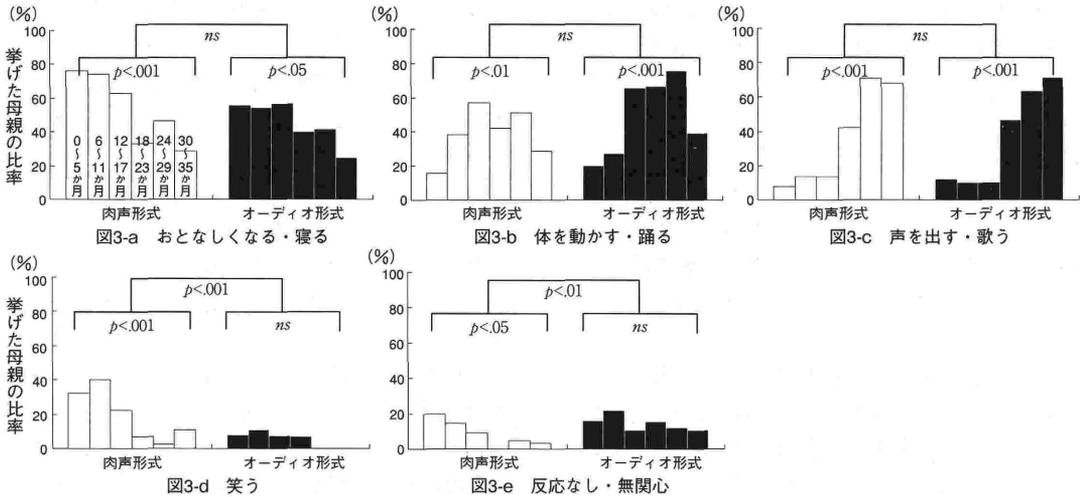


図3-a～3-e 各児の反応を挙げた母親の比率の形式間および月齢群間比較
(nは各月齢群の総数。度数が小さく月齢群間比較を行わなかった場面については図を省略した)

た結果を図3-a～3-eに示した。両形式とも比率が10%未満の反応である「歌の内容を実行する」、「催促する」、「音源に近づく」については、度数が極めて小さいため、形式間および月齢群間の比較分析は行わなかった。

「おとなしくなる・寝る」(図3-a)、「体を動かす・踊る」(図3-b)、「声を出す・歌う」(図3-c)は、形式間に有意差は認められず、いずれの形式でも30%以上の母親に挙げられた最も多い3つの反応であった。いずれも有意な月齢群間差が認められ、「おとなしくなる・寝る」は両形式とも0～5、6～11、12～17か月齢群で多く18か月齢群以降で少なかった(肉声形式： $\chi^2=31.98$, $df=5$, $p<.001$, オーディオ形式： $\chi^2=14.28$, $df=5$, $p<.05$)。「体を動かす・踊る」は両形式とも12～17、18～23、24～29か月齢群が他の月齢群よりも多かった(同順で $\chi^2=19.42$, $df=5$, $p<.01$, $\chi^2=39.65$, $df=5$, $p<.001$)。「声を出す・歌う」は両形式とも0～5、6～11、12～17か月齢群で少なく18か月齢群以降に多くみられた(同順で $\chi^2=90.46$, $df=5$, $p<.001$, $\chi^2=77.01$, $df=5$, $p<.001$)。

「笑う」(図3-d)は形式間に有意差が認められ、オーディオ形式よりも肉声形式で多かった($p<.001$)。肉声形式については月齢群間差が認められ($\chi^2=30.59$, $df=5$, $p<.001$),

0～5、6～11、12～17か月齢群がそれ以降の月齢群よりも多く、特に6～11か月齢群で最も多かった。

「反応なし・無関心」(図3-e)は形式間に有意差が認められ、肉声形式よりもオーディオ形式で多かった($p<.01$)。また肉声形式のみについて月齢群間の差が認められ($\chi^2=11.91$, $df=5$, $p<.05$), 0～5、6～11、12～17か月齢群で多く18～23か月齢群以降は少なかった。

その他度数が少なかったため形式間および月齢群間の差の検定は行わなかったが、「歌の内容を実行する」は肉声形式において0～5か月齢群以外の5つの月齢群全体で8.8%の母親に挙げられていたが、オーディオ形式ではほとんど挙げられていなかった(1.5%)。「催促する」は両形式で同程度に(両形式とも2.3%)、12～17か月齢群以降に挙げられていた。「音源に近づく」はオーディオ形式のみでみられた反応であり、全体で9.2%、0～5か月齢群以外の5つの月齢群で挙げられていた。

IV. 考 察

乳幼児に対して子守歌を使っている母親の比率は、肉声形式の方がオーディオ形式よりも高かったものの、両形式とも90%以上であった。すなわち現代の育児において、子守歌が高い比

率で使われており、さらに養育者が肉声で直接歌いかけることに加え、オーディオ機器や玩具や育児用品など、多様な音源が子守歌として取り入れられていることが示された。ただし本研究の対象者は乳幼児研究の協力者として登録されている母子であり、育児に対する関心が高い集団であると考えられる。さらに専業主婦の比率が比較的高く、子守歌の使用実態としては、やや高めを示していると考えられる。以下の考察はそのような母子における子守歌の使用実態について行うものである。

子守歌として使われる曲

子守歌として使われる曲は、ジャンルやアーティスト名での回答も含め、肉声形式で1,046種類、オーディオ形式で987種類と非常に多くの曲が挙げられ、極めて多様な音楽が子守歌として取り入れられていることが示された。よく使われていた上位20曲についてその傾向を調べたところ、童謡が最も多く、その他「江戸の子守歌」のような伝統的な日本の子守歌、「ゆりかごの歌」のような比較的新しい日本の子守歌、アニメやテレビの子ども番組の曲等がみられた。この結果は、小林ら⁵⁾に示されている傾向と非常に類似している。小林ら⁵⁾の調査においては、よく歌われる子守歌として挙げられた曲で最も多かったものは童謡であり、その他伝統的な子守歌の「江戸の子守歌」、新しい子守歌の「ゆりかごの歌」の人气が高く、アニメやテレビの子ども番組に関連した歌も含まれていた。小林ら⁵⁾の研究は子守歌に関して全国から寄せられた投書をまとめたものであり、本研究と同様に育児に関心の高い養育者の傾向を反映していると考えられる。少なくともそのような養育者においては、広義の意味での子守歌は現代も健在であり乳幼児の養育に活用されているという小林ら⁵⁾の考察を、以下に述べるように本研究は支持する結果となった。

子守歌が使われる場面

どのような場面で子守歌が使われているかを調べた結果、両形式合わせて最も多く挙げられた2つの場面は「寝かしつける時」と「遊んでいる時」であった。すなわち子守歌の機能とし

て予測された、児を鎮静させる機能と、注意を喚起し活性化させる機能に関連する場面で、子守歌が使用されていることが示された。児を鎮静させ寝かしつけるような場面には生後間もなくから、児を活性化させる場面には児が積極的行動反応を示すようになる生後1年目の後半ごろから、子守歌の使用が多くなると予測された。これに対しては、児の月齢が低いほど寝かしつけ場面で肉声形式の子守歌がよく使用されているという、予測に即した傾向が示唆された。一方「遊んでいる時」は予測に反し、生後3年間の遊びの場面では、肉声形式とオーディオ形式の子守歌が同程度に使用されている傾向が示唆された。

またいずれかの形式のみが主に使用される場面も浮かび上がった。肉声形式で挙げられた「入浴時」、「散歩や外歩き時」、「日常の世話をしている時」は、オーディオ形式ではほとんど挙げられなかった。入浴も含め、おむつ交換や着替えや歯磨きなどの日常的な世話をしている場面は1日中頻繁に訪れる。また散歩や外歩きにおいては、オーディオ形式を使いたい場合は、オーディオ機器や玩具を持ち出し携帯しなければならない。これらの場面は、いつでもどこでも対応可能であるという肉声形式の柔軟な性質が活かされている場面と考えられよう。

一方オーディオ形式が主に使われ、肉声形式はあまり使われていない場面は「乗車時」、「親が忙しい時」、「日中暇な時」であった。前者2つは、養育者が他の作業に従事し児へ十分に目が行き届かない、あるいは児の相手を十分にできない状況で、児の注意を音楽にひきつけておいたり、児の機嫌を保ったりするために使われている様子が見えてくる。さらに「日中暇な時」は特に積極的な児の反応を求めるわけではなく、非目的的に音楽を聞く、あるいは音楽鑑賞そのものを目的としている場面と考えられる。養育者が積極的・活動的に世話をしたり相互作用したりできない、あるいはしない状況でのあやしの手段として、比較的長時間養育者に負担の少ない形で音楽を聞かせることにより、児の情動を安定させたり、児の関心を音楽にひきつけ機嫌を保ったり行動を制御している場面と考えられることができる。

また肉声形式の「散歩や外歩き時」と、オーディオ形式の「乗車時」は、どちらも児の月齢が高くなるにつれて増加する傾向を示した。この2つの場面はいずれも外出の場面であり、児の成長に伴う生活空間や行動範囲の広がりが、月齢変化として示されていると考えられる。

今回挙げられた子守歌の使用場面からは、現代の子守歌が児を鎮静させる場面および活性化させる場面で使用されており、日常のシーンに合わせて、肉声形式とオーディオ形式が使い分けられていることが示唆された。

よく使われる曲の場面特性

各形式で子守歌として多く使われていた上位20曲を単用性と鎮静性からみたところ、両形式に共通して、①主に児を寝かしつける時に使われる曲、②寝かしつけ以外の特定の場面で使われる曲、③多様な場面で使われる曲、の3つが浮かび上がった。①は肉声形式では「ゆりかごの歌」、「江戸の子守歌」、「大きな古時計」の3曲、オーディオ形式では「星に願いを」、「ゆりかごの歌」の2曲であった。これらの曲は主に寝かしつけの場面で使用され、他の場面ではあまり使われていないことが示された。②の寝かしつけ以外の場面で主に使われる曲は、肉声形式で「散歩や外歩き時」に使われる「さんぽ」、「遊んでいる時に」に使われる「アイアイ」、オーディオ形式で「遊んでいる時」に使われる「さんぽ」であるが、いずれも①の寝かしつけ場面で使用されている曲ほど単用性は高くなかった。さらに③の多様な場面で使われる曲の多くは、母親世代になじみ深いと考えられる比較的新しい童謡であり、肉声形式ではこれらの童謡が寝かしつけや遊びなど多様な場面で歌われている様子がうかがえた。それに対しオーディオ形式では、童謡の多くが同じように多様な場面で使われているにも関わらず鎮静性は肉声形式ほど高くはなく、寝かしつけるためにはあまり使われていないことが示唆された。オーディオ形式で鎮静性の高かった「きらきら星」、「ゆりかごの歌」、「星に願いを」は共通して夜や睡眠をテーマとして備えている曲であり、もともと寝かしつけに適した比較的ゆったりとしたテンポや穏やかな音響で収録・搭載されていること

が多い。すなわちオーディオ形式の場合、収録・搭載されている演奏形態や音響特徴は、曲そのものが持つテーマや雰囲気を反映して演奏され固定的であり、そのため使用場面に制約が生じることが考えられる。たとえば童謡などのCDに多くみられる周波数の高い声ではっきりと歌詞を歌ったものは、遊び場面には適しても寝かしつけの場面には適さないかもしれない。一方肉声形式は歌い方でテンポや高さを自在に変えることができる。前言語期の乳幼児に対して発せられる特徴的な語りかけ音声（マザリーズ）の研究では、音声に含まれるリズムや抑揚等のプロソディーが、乳幼児に発話者の感情性情報を伝達し、児の情動や覚醒レベルを調整することが示唆されている^{17,18)}。また乳幼児に対する歌唱音声を調べた研究では、児を鎮静化させる時と活性化させる時とで、異なる音響特徴が見出されている¹⁹⁾。したがって語りかけ音声と同様に、肉声形式の子守歌が音響特徴により乳幼児の情動・行動を調整する機能を持ち、母親がその機能を意識的あるいは無意識的に駆使している可能性が考えられるだろう。

子守歌に対する児の反応

両形式合わせて最も多く挙げられた児の反応は「おとなしくなる・寝る」、「身体を動かす・踊る」、「声を出す・歌う」であり、児を鎮静させる機能、注意を喚起し活性化させる機能という、2つの機能に関連する反応が母親に認識されていることが示された。

児の月齢との関連については、乳幼児の音刺激に対する反応特性等から、生後1年目前半頃は受身的かつ静的反応が中心であり、生後1年目後半頃には運動・発声を含めた積極的な反応が増加すると予測されたが、「おとなしくなる・寝る」と「笑う」が0～17か月齢頃に多くの母親に挙げられていたこと、「体を動かす・踊る」が12～17か月齢頃から、「声を出す・歌う」がやや遅めであるが18～23か月齢頃から多く挙げられていたことから、ほぼ予測に即した乳幼児の反応を母親が捉えていることが示された。

さらに「笑う」という反応も予測されたように、オーディオ形式よりも肉声形式で多く、しかも0～5か月齢という早い時期から多くの母

親に捉えられていた。乳児が示す微笑は、親の養育行動を積極的に引き起こすように機能するヒトに生得的に備わった行動パターンのひとつであり、「乳児が微笑する顔の特有なかわいらしさは、育児に疲れた親の気持ちをなだめ、子への愛情を高めさせ」、「乳児の微笑をもっと引き出そうとさまざまな働きかけを」養育者に行わせる機能を持つとされており¹³⁾、「笑う」という反応は、子守歌のポジティブな効果を母親に認識させる重要な反応のひとつであると考えられる。運動や発声など積極的な反応が出現する以前の乳児に対しては、肉声形式の子守歌の方が乳児の笑いを引き出しやすく、延いては歌い手である母親に対してもポジティブな効果を与えることが期待できるであろう。

運動や発声といった児の積極的な反応が母親に捉えられるのは、12~17か月齢もしくは18~23か月齢頃からであり、それ以前は鎮静方向への反応や微笑といった静的な反応が中心であった。さらに「反応なし・無関心」は予測された通り、全体的には肉声形式よりもオーディオ形式で多く挙げられていたが、予測に反し0~11か月齢頃には両形式で同程度挙げられていた。それにもかかわらず、0~5か月齢頃からすでに多くの母親が遊び場面を含む多くの場面で子守歌を使用していた。このことは、子守歌に対する児の反応が曖昧で、子守歌の効果を実感しにくい時期から、すでに母親は積極的に子守歌による働きかけを開始している実態を示すと考えられよう。

なお今回まとめられた「体を動かす・踊る」、「声を出す・歌う」、「笑う」という反応は、質の異なる反応を包含している。例えば生後半年頃からみられる音楽に対し体を動かす反応と、2歳児の踊る反応は質的に異なり、生後2、3か月齢の微笑と生後半年以降の笑い、乳児期のクレーイングや喃語と幼児期の歌も同様である。本研究では母親が捉える乳幼児の反応をそのまま把握するため、多肢選択式ではなく自由記述式による回答とした。その結果、このような違いを区別できない回答が多く、結果としてこれらの反応が同内容としてまとめられた。今回認められた月齢群差は、児の特定の反応の加齢にともなう増減だけでなく、質的に異なる行動へ

の推移も含んでいる。また実際の児の反応は多種類の反応が混在する複雑なものであり、今回の結果は各月齢で最も顕著な児の反応、あるいは母親が最も認識しやすい反応が記述され、その結果母親が捉えやすいレベルの大まかな8つの反応が浮かび上がったと考えるべきであろう。

以上今回の調査では、現代の育児における子守歌使用の実態として、子守歌が多くの母親に使用されていること、オーディオ機器等による音楽も子守歌として取り入れられていること、また肉声形式・オーディオ形式それぞれの特徴を活かして使い分けられていることが示され、子守歌が児を鎮静化・活性化する機能を担っていることが示唆された。子守歌のどのような要素がどのようなメカニズムにより乳幼児を鎮静化・活性化させ得るか、そして歌う側の養育者にどのような効果をもたらすかについては、今後実証的研究が必要であるが、本調査では少なくとも母親が子守歌の鎮静化・活性化機能を認識しており、育児において一定の機能を担っていることが示唆された。肉声形式・オーディオ形式それぞれの特徴を活かした子守歌の活用、子育て支援内容への反映等を期待したい。

本稿の内容の一部は、日本保育学会第58回大会(2005年、東京)にて発表した。

文 献

- 1) Trainor L.J., Clark E.D., Huntley A., et al. The Acoustic Basis of Preferences for Infant-Directed Singing. *Infant Behavior and Development* 1997; 20 (3) : 383-396.
- 2) Bergeson T.R., Trehub S.E. Absolute Pitch and Tempo in Mothers' Songs to Infants. *Psychological Science* 2002; 13 (1) : 72-75.
- 3) Trainor L.J., Zacharias C.A. Infants Prefer Higher-Pitched Singing. *Infant Behavior and Development* 1998; 21 (4) : 799-806.
- 4) Nakata T., Trehub S.E. Infants' responsiveness to maternal speech and singing. *Infant Behavior and Development* 2004; 27 : 455-464.
- 5) 小林 登, 松井一郎, 谷村雅子. 子育てと子守り歌. *周産期医学* 1993; 23 (6) : 885-889.

- 6) 高松晃子. 子守歌の現在. 福井大学教育地域科学部紀要Ⅳ (芸術・体育学 音楽編) 2002 ; 36 : 1-19.
- 7) 繁下和雄. 乳幼児にとっての歌. チャイルドヘルス 2003 ; 6 (12) : 4-7.
- 8) 川原井泰江. 守り子と女たちのこもりうた. 東京 : ショパン(株), 2003.
- 9) Kuhl P.K., Tsao F.-M., Liu H.-M., Foreign-language experience in infancy : effects of short-term exposure and social interaction on phonetic learning. PNAS 2003 ; 100 (15) : 9096-9101.
- 10) 阿部万里子. 重症心身障害児・者に対する人が直接的介入による音楽療法の効果の検討—サーモグラフィを指標とする録音音楽と歌いかけの比較から. 日本音楽療法学会誌 2006 ; 6 (1) : 67-74.
- 11) Hargreaves DJ. Musical development in the preschooler. Hargreaves DJ. The developmental psychology of music. Cambridge : Cambridge University Press, 1986 : 60-82. (ハーグリーブス DJ. 就学前の子どもにおける音楽の発達. ハーグリーブス DJ. 著, 小林芳郎訳. 音楽の発達心理学. 東京 : 田研出版. 1993 ; 70-97.)
- 12) 田中美郷, 小林はるよ, 進藤美津子, 他. 乳児の聴覚発達検査とその臨床および難聴児早期スクリーニングへの応用. Audiology Japan 1978 ; 21 : 52-73.
- 13) 高橋道子. 笑う—微笑の発達を中心に—. 心理学評論 1992 ; 35 (4) : 474-492.
- 14) 志村洋子. 一歳児の歌—歌唱様発声の音響分析的研究. 日本音楽教育学編. 音楽教育学の展望Ⅱ (下). 東京 : 音楽之友社 1991 : 152-165.
- 15) 津守 真, 稲毛教子. 乳幼児精神発達診断法 0歳～3歳まで. 東京 : 大日本図書, 1995.
- 16) 川喜田二郎. 発想法. 東京 : 中央公論新社, 1967.
- 17) 志村洋子. マザリーズ—親子感情の相互作用にはたす役割—. チャイルドヘルス 2001 ; 16 : 16-19.
- 18) Fernald, A. Intonation and Communicative Intent in Mothers' Speech to Infants : Is the Melody the Message? Child Development 1989 ; 60 : 1497-1510.
- 19) Rock A.M., Trainor L.J., Addison T.L., Distinctive Messages in Infant-Directed Lullabies and Play Songs. Developmental Psychology 1999 ; 35 (2) : 527-534.

[Summary]

This study aims to investigate the current use of lullaby and play song, addressed to infants and toddlers during their care at home. A questionnaire had been presented to 261 mothers of 0- to 35- month-old children, concerning lullaby and play song. The answers revealed the use of both raw human voice (mother's singing to their children) and recorded music, which is played on audio devices, under situations of mothers lulling their children to sleep as well as play time. However, the frequency of the raw human voice use was found to be greater while lulling the child, relative to recorded music use. Moreover, the two styles were properly used in accordance to situations. The child reaction to lullaby and play song such as, falling to sleep, body movement, and vocalization were reported to be in the same degree for both styles, while the smile and laugh were reported to be more frequent in raw human voice style, relative to recorded music style. The study concludes to say that both presentation styles of lullaby and play song function to soothe and activate infants and toddlers during their care.

[Key words]

infant and toddler, lullaby and play song, questionnaire, mother's singing, music on audio-device